

日本書紀

二

太政官文庫				和 書 門
二	一	九	八	
〇	〇	二	八	
冊	架	函	號	

內閣文庫				和 書
三		八	八	
七	二	四	九	
函	冊	〇	八	
五		架	類	

內閣文庫	
番號	和 8498
冊數	20(2)
函號	137 46



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



日本書紀卷之二

神代下

天照大神の子正哉

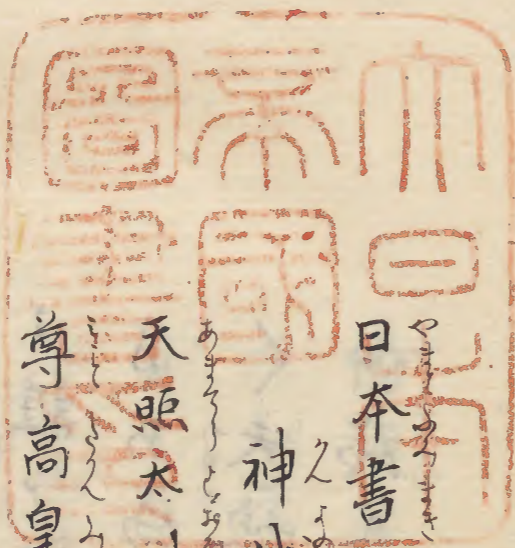
天照大神

天照大神

高皇產靈尊の御子正哉

高皇產靈尊の御子正哉

廣辻氏
藏書記



日本書記卷第二

神代下

天照太神の子正哉昔

尊高皇產靈尊のまむの栲幡千千姫を娶

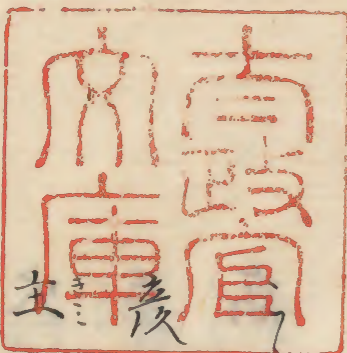
て天津彦彦火瓊杵尊を生ず故皇祖

高皇產靈尊とてをきて久くおほき

るを以て崇養すすふはひし皇孫天津彦

彦火瓊杵尊とてりて葦原の中国の

まとせんとおほきりしと被地多し螢



天忍穗耳

火の光神ひのくわみかみをひひ蠅は群ぐん邪神よかみありま
 草木くさきもくくよくよくのいふもあり故
 高皇産靈尊たかみむすひたまひのみこと八十諸神やそひろかみたちなりは
 てとりてのいもく昔あまのあまの
 國の邪鬼よきまをちひ平一のんをいふは
 誰とほのちさそよき人ひと祈いのちくハ示諸神
 ちあらんおとあらんあまの天穗日命あまのぬかひのみことこれ神かみの傑たけくちりあらん
 言ことはちさるへんやうよめくの言こと

倭やまと順のりまてまはち天穗日命あまのぬかひのみこととりてゆひ
 てむきしちあらん北神きたかみ大己貴神おほみかひのみこと
 ちよのまにびて三とせうちりまてあを
 其子みこ大背おほせ飯いひ
 三熊みくまの大人おとな武むす三熊みくまの大人おとな
 故ゆゑち父ちちの
 故ゆゑく人ひと
 尊たかみ諸神もろかみちをはくはく
 言ことはちいふのちをちひはくはくはく

一酒を前よりする時より人にもむむの尊
其夫と云ふはしるすの酒をくこの矢か
とけら肯むが天稚彦よまひり矢か
と血そのやよ深きしりきしり国神よあ
ひくひてあつはやうの夫をとりに
くくろけあろくまふその矢おららる
とけらあめらうひこの胸上よらめ時
はめらうひこ新掌して海ふせり時り矢
よあつてくろとろく死ぬれ世人のい

ゆりく矢畏へきし中を縁るめあめり
ひこの妻下照姫るきつらひ祥天よき
この時の天国王その哭祥をきてをれ
ちら夫天稚彦とて死するをこそ知てをれ
ちら疾風をやとて尸をあけ天よきむ
をれちら喪屋を法らりて殯ををれちら
川鷹とて持傾頭者をよむ持帚者
一之よををりてきくわらと川鷹
ちりてちうきめらとひ

まゝ 雀さきめをもて 春つば女めとん

一 土をばらち 川くは鷹たかをもてきこりめち

と 一 土をばらちとん 鳩とらをもて尸し者もの

と 一 土をばらちとん 鶺鴒さざなみをも

て 哭なみ者ものとん 鴛う鴦やうをもて 造つく錦きん者ものとん 鳥とり

ちよて 完むす人ひととん ちよて ちよての鳥

ちよて 任まか事ことを

と 一 土をばらち 八日八夜やまをさしつあつこ一のふ足

ちよて ちよて あめふのひこあゝ糸のちよては

国くにありし 時とき味あじ難がた高たか度たぐ根ね神かみとん 交ま善ごう

故ゆゑあらしも ちよて ちよて の 神かみ天あめの ちよて

裘ふをもふらぬ 時ときの ちよて 神かみの ちよて ちよて ちよて

ちよて ちよて の 平へい生せいの ちよて ちよて ちよて 故ゆゑ天あめ推おし

疾はやのらちちよて ちよて 妻め子こちよて ちよて ちよて

昔むかし君きみちよて ちよて ちよて ちよて 衣い帯おびの

ちよて ちよて ちよて ちよて ちよて 時ときあり

ちよて ちよて の 神かみの ちよて 作つく色いろの ちよて 友とも

の ちよて ちよて ちよて ちよて 故ゆゑちよて

きたるものしを〜してちをふぶの超るあむ
いともんられ我を亡者あるま川といひて
それららその帯紐大葉川 まきの名を授
てりて表屋とさうのふせぬこれきれららあら
て山とけ今この国藍見川の上ある表
山いれり世人生もて死ふひとあ
やま川いともいひしその縁ありよら
高皇産靈尊さうは諸神うちをほとく
てほごあらうのさうの国はほごいへ

者をえしひゆふこれまうさう
神の子磐筒男磐筒女生可せり子経津主
神いしゆもん時天名屋まあ神核威
雄走神子瓊速日神瓊速日神の子燖
速日神 燖速日神の子武瓊杵神
この神も〜んてまうさうあ〜、経津主
神のいひまの丈夫〜一吾もま〜を
よあ〜もわその〜も〜い〜さ〜
てそれららふほの神〜も〜てあ〜

のまゝの国を平しむニせしらの神
出雲の国五十田狭の河にありて
てまのちち十のほろをめぐりて
また地を治してその鋒端に治りて
大己貴神よとてのつゆもくしん
むすひの尊皇孫とくしんもて此地
の居しむしんをおほし故まの我ニ
の神を治ししむしんもて大己貴神
いんごらまのしんやるや時大己貴神

ついでまのしんもて親よとて
ふしこのしんもてしんもて
其子事代主神ありていほの国の三
穂の碕にありしんもて樂とん式
之鳥あそひしんもてしんもて諸
永大鳩船なるて使者稲肖脛をのせてや
てしんもてしんもてしんもて
神のしんもてしんもてしんもて
とふ時事代主神はしんもてしんもて

天神の借問とまじりてのあり我
父よりくくさりまはるる一昔まじりたが
ひまらりよとて海中の八重倉宋籠をつ
くりて私世をふんて避ぬはるひきて
ふりてつらにともまうひ故大己貴神
まはらち子のみまうひともまを二は
らの神まうりよの海まうり
あつにもまをまの故昔まうり
まはるる一昔一昔不せりまうり
防 禦

国のうちの諸神よりあつりまはるる
一昔まきてん今我よりまはるる又
あつてまはるるありのありといひてまは
るる国平一とまはるる一廣平をまて
二はらら神よまはるるまはるるのいひ
く昔このおこなをまはるる一功をまはるる
天皇より私ほこをまて国をかまめんとす
るのまはるる平安まはるる今我よりまはるる
ら八咫のくはるる一とまはるる

隠しぬうら二つらの神りくくのまら
ろちぬ鬼神らとほこるふ

一之二は一らの神はひ、邪神とよ草

木石のくくひをほこるふてくひをて

平かちんぬ其うらまぬ所い、星の神

香こ背胃のこ故ま、倭文神建業榎

命とほつとせしきれちらうらひぬ故

二は一らの神天ののほ

ほひもてうらと酒を時、高皇産吳

尊真床追の衾をて皇孫天津彦々火

瓊々杵尊とおほつてあさくさかま

皇孫をれちら天磐座ををらちら

天の八重雲ををらして後威の道列道別

て日向の襲の高千穂の牽、あさくさくちん

をてよして皇孫遊行、らまれちら穂日の

二上のあさのうさげ、浮渚在平処、互し

て齋究の空國頓立、行て若田

の長屋笠挾の碕、いづりちんその地、一人

河みはら 事勝国勝長狭とるの皇孫
とつてのいもち 国ありやりるやうてまう
くくうの国あり請こころのまう遊
いもく故皇孫いいてちり酒を時彼
国美人あり名を廉葦津姫 あつひめ 神若田津
姫 まきの名ハ木花の といふ皇孫の美人と
閑耶姫 あひま といふ皇孫の美人と
てのいもはく 汝を誰むとめそやうて
まうさう妻とて天神大山祇神を娶て
むすのいも 児あり皇孫を幸決を

もら一夜よして 有娠 皇孫いつる
むしかほしてのいも 未之信 天神といふ
もらんそよく一夜の間人をして
せんや汝のいも あつひ 我よあり
政廉葦津姫 あつひ いりうみ酒つと
もら無戸室とほりてその内入りて
誓 うきま 言ていも妻とめり 天孫の胤
あもんいもい酒さやけららひんじ
酒いも天孫のみこは火とる 害

とあつては、火を放て室やくと
しめておる烟の未より生れ、児を火闌降命
と名づく是隼人ホリ始祖あり次、狹避て
居とせし生れ、児を彦火と出見尊と
まゝい次、かきおみこを火明命とまゝく
是尾張連ホリ始祖ありまゝて三つらの子
まゝい久くまゝくして天津彦彦火瓊々
杵尊萌まゝめ筑紫の日向の可耄の山
陵、葬りし

一書、云天照太神天稚彦、みことの
うしての、備へて、原のまゝの
そ是昔見王、まゝ地あり、まゝを
み、残賊強暴横悪神もあり、故に
先ゆいて平、まゝの、まゝして、まゝ
麻児をよひ天真麻児、夫とまゝして、
つちまゝ、あゝひこみ、のりまゝ、まゝて、
まゝて、まゝまゝ、多、国神のまゝを、娶
て、八年、まゝまゝ、まゝ、まゝ、まゝ、故

天照太神を以て思兼神を以て
 そのまうこせううちをまひ終ふ時、思
 兼神を以てまひしてまうこせううち
 くまひ終ふ時、思兼神を以てまひして
 かの神のまうこせううちをまひしてま
 兼を以てまひしてまひ終ふ時、思
 てあめまうひこづ門のまひゆり杜樹の杪
 へめて鳴ていさくあめまうひ何のゆり
 へとせの間いまひまひまひまひまひ時り

国神あり天探女あまのさぐめとまうくその雑をこ
 てまひまうあまの鳥あまのとりの上をりい
 らうまひ天雑を以てまひ天神の
 まひあまのまひまひあまのまひまひまひ
 まひまひまひまひまひまひ天雑の胸むねより
 まひまひまひ天神のみまひまひまひ時
 天神その矢をまひまひまひまひまひ
 昔むかしまひあまのまひまひまひまひ矢やかま
 今まひまひまひまひまひまひまひ

まゝら夫をうつて 呪^{かま}てのゝ 悔^くちし
きこひきこ心をうつて射ハをれをらあめこ
うひこもつれをまゝしれんも 平^{さへ}を
ちめて射ハをるはらさまゝあらんよてか
一 きてしめふまゝしれんも 矢^やおら
くつてあめまひこつてしれん中
めよてりてたちとこり死^しぬれ世人の
いもゆつてしめをまゝしれんも
ここのもとなり時、あめまひこ 妻^め子と

も天よりくつて櫃をりて天のねまゆ
ひてりやをほくつて 瘡^{かさ}一^つあ^うこ^うせ
たりきこ、あめまひこ 味^{あじ}粘^{ねり}高^{たか}彦^{ひこ}根^ね
神と交^{まじ}善^{ぜん}一^つ 故^{ゆゑ}あらまゝたつひらひの
神天のほつて表とまらひおほまよ
條^{じょう}を時よの神らをのりて 天^{あま}推^{おし}
ひこもひこ、あひ似^にまゝ 故^{ゆゑ}あめまひ
こ、妻^め子^ことちにてまゝこんて 吾^{われ}君^{きみ}と
るほまゝ、くつてしめをまゝ 衣^い帯^{おび}、

よらつちをきつちをきつちの時、はらち
さつちの神、つて云明友、うせ
と故昔もつちら未ふらぬ、いんそ死人
と我、あつちをきつち、つてきれちち十、
のほちちをきつち、つてきれちち十、
あつち、つちをきつち、つてきれちち十、
喪ふ、つちをきつち、つてきれちち十、
ま、あつちをきつち、つてきれちち十、
なる時、あつちをきつち、つてきれちち十、
神、つてきれちち十、

ま、あつちをきつち、つてきれちち十、
るく故喪、つちをきつち、つてきれちち十、
い、あつちをきつち、つてきれちち十、
ひめ流人、つちをきつち、つてきれちち十、
これ、あつちをきつち、つてきれちち十、
あつち、あつちをきつち、つてきれちち十、
あつち、あつちをきつち、つてきれちち十、
あつち、あつちをきつち、つてきれちち十、
あつち、あつちをきつち、つてきれちち十、

又奇まみして云

あまのこゝろひるほめのえをいふとせ

いふとせのこゝろひるほめのえをいふとせ

いふとせのこゝろひるほめのえをいふとせ

いふとせのこゝろ

この両首奇辞ハ今夷曲と云くはて

うして天照太神 思兼神の妹萬幡豊秋

津姫命をりて正哉吾勝々速日天忍穗

耳尊、配て妃としてあ原のうら

国ハゆまきりいふとせの時に勝速日

天忍穗耳尊あまのうきをいふとせ

條睨てのまきり皮地をさやうり石須頼

傾山目杵之國のいふとせのいふとせ

いふとせのいふとせのいふとせ

いふとせのいふとせのいふとせ

武甕槌神をいふとせ経津主神と云

いふとせのいふとせのいふとせ

の神出雲の国ハあまのうきをいふとせ

大己貴神よとてのこもまうく汝の国
をめて天神よとてまうくんやいろわこ
くまうく昔見串代主のこみ
射鳥遊遊して三津の碕の今の今
ほさうさのりて報まうくんをれ
まらほひをまうてまうくつてま
うさく天神所を来くまうんそ
とてまうくんや故大己貴神その
子のこもまをめて二まうらの神よと

ととまうを二まうらの神をれま
天よのほりてまうくをりてまうし
てまうくの中つ国をれ
まうくひをり時よ天照太神よの
まうてのこまうくまうに若
鬼をあらまうくつちまうく
まうくとまうくは皇孫まうく
まうく天津彦火瓊杵尊とまうく
時よまうくひとありてのこまうくけ皇孫と

一七尋と云ふてまゝ口尻あつて
目眼八咫のつここの、とくみして
うやまゝも赤酸醬に似て
従の神をほめて往てとつて
八十万の神うちあみする目くらてあ
まふ、とをいふ故、と天佃女よこの
まゝての、まゝも汝も是目人、まゝ
まゝの、まゝありまゝく往てまゝ
天佃女よこの胸乳とあけけ

かきよて裳帯を臍の、まゝ
まゝあつてまゝひてまゝ、まゝの時、
の神とほてまゝ天佃女、まゝかゝを
まゝ、まゝ何りまゝ、まゝてまゝ天照
太神の子の、まゝみちまゝ居
と、まゝ誰をあつてまゝ、まゝの神
まゝてまゝ天照大神のみ、今降行
まゝとまゝてまゝ、故むまゝ、まゝ
てあまの御名、まゝ猿田彦大神

時、天鈿女あめのつむぎとて云い汝なも、我われも
いふに、ゆらんやとて、我汝われなとさきいふに
ゆらんやとて云い昔むかしさういふは、
きゆらん天鈿女あめつむぎも、
こよひのまもらんそや皇孫すめみまつとて、
いすらんそやとて云い天神あまのつみのみ、
とて、ちらほさよほくの日向ひうらの高千穂たかちほ
穂觸ほふの峯かみ、いすらんそや、昔むかしも、
ちら伊勢いせの狭名田さなな五十鈴川いすずがは上うへ、

いすらんそやとて云い我われを、
い故汝ゆなも、我われも、
いすらんそやとて、
天磐座あまのいわくらとて、
け授威あづかの道みち別わか々々とて、
いすらんそやとて、
ちらほくの日向ひうらの高千穂たかちほ穂觸ほふの峯かみ
いすらんそやとて、
ちら伊勢いせの狭長田さなながは五十鈴川いすずがは上うへ、

神八もろもろ天鈿女命猿田彦神の
所^ニ在^リのまに^ニほの^りて侍^ヒる時
皇孫天鈿女命みことのり^ハす
く汝^ハあ^リくあ^リくあ^リく神の名
を^シて姓氏^トも^シて^ハ猿^ノ女^ノ君^ノ号^ト
あ^リて故猿女君ホの男女^ニれ^テりて
君^トも^シこれ^ハその縁^ナり
一書^ハ云^フ天神経津主神武甕槌神と
ま^シてあ^リて^ハの^りて^ハ国と平定^ス

む時^ハ二^ツち^ハらの神^トも^シて天^ノあ^リ
き神^ハあり名^ヲを天津^ノ彥^ノ星^ノも^シての^りも
天^ノ香^ノ々^ト背^ヲ男^トと^シて請^ヒりて神^トと謀^ル
て^ハの^りて^ハあ^リて^ハの^りて^ハ中国^ト
と^シて^ハ人^ノの^り時^ハ斎^ノ主^ノ神^トを斎^ノ之^ノ大人^ト
と^シて^ハも^シて^ハこの神^ト今^ハ東^ノ国^ノの^り楨^ノ取^ノ
地^ハの^りも^シて^ハ二^ツち^ハらの神^ト出^ル
雲^ノの^り五十^ノ田^ノ狭^ノの小^ノ汀^ノも^シてあ^リて^ハも^シて
大^ノ己^ノ貴^ノ神^トと^シて^ハの^りて^ハ汝^ノも^シて

この国を以て天神あまのつみを奉らんやソなるに
ついでまうらうとくうとふ汝ニそら
の神あまのれ吾あまの知しるるさゆせしあさる
故許むかひへつとをとりふうふ経津主神つづみかみ
まはちちらふのありてふのこまう
を時とく人ひとをむむひの尊うやまつをいさち二
はらの神とくははりて大己貴
神かみのみよりしてのほく今汝の
まうひひとをさくふくそのこは

あり故さうに條々じょうじょうとしてみことの
し終はつをれ汝なの頭露あたまのの事よ
うう吾孫あつみまをさへつて汝を
まうらうらりて神のこを治さへ又
汝な天日隅宮あまのひさみのみやをむつて今ほくらま
ほらんらんとをれち尋たづねの栲繩くわくじゆとりて
ゆいて百ひもひあまう八十むむいせん
その宮をほく制せいを柱はしらをさうらちを
かくふく極はつをさうらちひろくあつく

とくろもまらうふひとをまししちち又
わじよのまきよあつふ首渠者大物主
神とふ事代主神まらちち八十ふ
此の神と天高布あつちちあつめひきめて
りて天のほをて其ほことのつち
をまらふ時言皇産靈尊大物主神
みよのうし給ちけ汝り一國神とりて
妻とせそ昔まら汝とうとこ心ありとに
りし人故いそ昔むきめニ穗津姫とりて

汝のあもせて妻とせんよろく八十
ろつ神とらとひきめてひとゆ
皇孫のよめよまらちちてましちち
つりちちちあまをれちち紀伊國の志
初のまをほをわキ置帆負神をりてま
とめて作笠者と一彦狭知神を作者
と一あめまきい天目一箇神と作金者あまのいと一あまのい天日
鸞神と作木綿者あまのいと一あまのい掃明玉神を
作王者と人あまのいまらちち太玉命あまのいをりて

弱肩よわうたよふとくをきかたよりぬき御年代ごよひ
してりてこの神をまつりてはけめく
えんよりかみりまゝ天児及命神あまの
事をはりさし宗源あり故太占乃なま
ト事とてほえまららむじんみ
ひとひの尊よみことのりしてのさ
く昔をきかたら天津神籬をあまの
あつ川磐境いさむらをさうとてまゝ皇孫
のいせを斎まらん汝あまのこむ命

太玉命よくあはつひよりきかたより
ちてあ原のさうりてまつりてま
皇孫のよめいりしまつまをい
二何らの神をほりて天孫穗耳尊あまの
きりてあまくさきよの時天照太神
いてのりてのりて天孫穗
耳尊まつて祝ほろてのさし昔見みの
いづのりてえんまらんはる昔
なする床をよめく

殿といひ川よりしてとて新の境とせし
まき天兒屋命太玉命あまのこひのみことのり
らく新にいらるる神かみをさる
く殿の内よごめひこよくほせさほ
りこをさ又みよのりしてのほ
く昔あむ言天原あまのよきうめを新庭にいの
穂ほをりてもく君兒きみこよまきまき
もら高皇産靈尊たかみかみの女むすめ号美情みこころ姫ひめを
て天忍穂耳尊あまのしのほみみ配めあはせて妃めかけとてあま

りまきしめ終おひふ故時むかひに虚天うつらにりて
兒こをうむ天津彦火瓊あまの杵尊きねとまきまき
ほて天皇孫あまみまをりて親おやのみとて入いてあま
く玉命たまみことをむ諸部しよぶの神等かみらとてことく
くいれあひさほくまきみまつめの一ひとり
前まへにまきまきくまきしめて後天忍穂
耳尊みみ天あまのりしめ故むかひあほつひこほ
まきの尊みこと日向ひなたの穂日ほひ高千穂たかちほの奉たてまつりあ

國あまのりともくも 勅のまゝくとも
うき時、皇孫よりて宮殿をくとも
やまみまの 後、海濱よりてまゝくとも
の美人をえそむを皇孫と仰てのまゝ
く汝もこれ誰か、むとめをくともて、
國あまのりともくも 勅のまゝくとも

く妻も是大山祇神のむとめ名く神吾
田原葦津姫のまの、名、木花開耶姫
よりてまゝくとも、昔、姉磐長姫人
り皇孫のまゝくとも、昔汝もて妻とせ
んとおふ、いん、くともて、妻、
父大山祇神をん、り請りてむとめ、
皇孫より大山祇神、くともての、
く昔汝もむとめをみそむる、
そんとおふ、くとも大山祇神をいん、二

のじきめをちりて百札飲食とりてめて

つてまひし時皇孫姉をふりて

たひしめさきしてゆけさきふ妹の国

色とおほしてのり幸せんまれをら

一夜してまみぬ故いさるる姫おほ

ちりて詛て之ふとむ天孫妾とちりてけ

こせしひしめさきしうのらん児

こいのちちううしてさほひの磐石の常

さめくくまし今まてさるるすて唯

オひよりめせり故そのうめらん児れ

らそ木花のこまひよりりおらるん

一云磐長姫ちりうてて唾泣て云八貝松

蒼生者木花のこまひよさるるくうつろ

ひておらるるんこれ世人いのちらるる

このりともりこのち神吾田麻草津

姫皇孫とんてまらるるはるるる妻を

天孫の子をちりめりわくくよめて生

まはるるる皇孫のこほさるるま天

神の子と云ふといふ一夜一人を
とせしめんやと云ふ昔見の
花開耶姫と云ふことりて悲恨
ち無戸室をほりて誓ひて云
る是れ他神の子をたはつ
いとひろき人なれはるる天孫の子を
つとむひはるるまゝ生
と云ふもその室の中へ入て火をほりて
室をやく時、ほのぼのめておる時

と云ふ児をうむ火酸芥命と云ふ次
火のさう人なる時、児をうむ火明命と
なつて次、みこをうむ夜火と出見尊と
の号も火折尊と云ふ人
一書云と云ふあのはあつ時、うめ
見火明命、次、ほのぼのさう人なる時、
うめ、みこ火進命、次、火酸芥命と
つと次、火炭と云ふことりてうめ、みこ火
折炭火と出見尊と云ふことりて、この三はらの子火

孫のミサコよまゝしてゆきくさる日向の詔
のち千穂の穂日の二上の峯あまのり
さけしつゝ浮渚在之平地
立して齋完の空国と頓丘の国
きとをりて吾田の長屋笠狭のみさき
つゝもみ時、夜処、ひらりの神あり
名と事勝国猪長狭とふ故天孫
の神、ついでにいほく、国ありや
てまうさくありよりてはうさくみとのり

のまゝくしてまうらん故天孫夜処
とまうるふその事猪国勝神とこれ
いさるこの尊の子なりまのの名、いわの垣土
禰翁
一書よ云天孫大山祇神のいとの吾田廉
葦津姫をぬひをぬら一夜、まゝぬ
ほひ、四つらのみこをうむ故吾田廉葦
津姫ミコをうむひてまうんてまうせ
天神の子をむ、うさく、うさく、養ま

ほくろく人か故りりてほをまひりてかへり
しじよの時よ天孫その子しちをみえまじ
てあぶらひてのいほをくあうる急や
昔えいしちらまよくも生かせらるる故
昔田廉草津姫をれちらいつりて云るん
まほを妾とあこたりこまふや天孫の
とほをくんうらふ故あはれいん
そらしとまよあめの神のみとふとあ
ふよく一夜の間人きりてちりせせん

かほこまはれまよあはれいんをりて昔田
鹿草津姫ほをくうらみて毎戸室を
ほくりてその内りりり誓て云妾と
らあはれ天神のみよあはれ人をか
まよへやまよせん是も天神の
みよあはれまよあはれいんとちうらんそ
らまよら火をほきて室をくくその火の
まよあ明らまよまよあはれいんをきひて出見
まよあまよのまよ昔そこれ天神のみよあ

とありし流人なりてこれありて人と思ふ
是昔見たりしとき天神より一夜
してさし傳へしとき汝聖にあや
つてさきありみこちきし倫をく
し氣はくことをあつさんとありし
ゆよさきめの日の河をけしとはは
一書よ云天慈穗根尊より人と思はし
尊のみしきめ抄情千に姫百情姫命を
尋てまき之より人と思はし尊の思ひ

め火之戸幡姫児子に姫命 志つて
児天明命をきりむ次天津彦根火瓊
々杵根尊よりその天火明命の児
天香山に尾張連ホとを所おやうり
皇孫火瓊々杵尊を河原のさし所あ
はるしてさきつていふをよんで
高皇産靈尊八十諸神よりみこ
のりてのさしはくありてのさつ
国ハ磐根木株草葉とるをよりの

并命とうむ次火折尊をうむまらつ
まの号彦火火出見尊母の誓をて
験一酒さ初ぬまもくし皇孫のみ
るうまらるる豊吾田津姫皇孫とうて
はじまはらるる皇孫うまくとまひて
うまらち哥よみ一のうまら
おきほしそつはよれまらるる
あまのうまらるるよまららるる
一書一云く人まむまひの尊のみむま
あまのうまらるるよまららるる

天萬栲幡千千幡姫
一云く人まむまひの尊のみむまめ万幡
姫兒玉依姫命この神天志骨命の妃
とらりて兒天之杵火々置瀬尊をう
えまはるる
一云揚速日命の兒天大耳尊この神
丹鳥姫を娶て兒火瓊々杵尊を生ま
一云神高皇産靈尊のみむまめ栲幡千
幡姫兒火瓊々杵尊をうみまらるる

一云天杵瀬命あまのきせ吾田津姫を娶て児火明いのあき命を生ゆ人次に火夜織命次に彦火
火出見尊

一書り云正武吾孫々速日天忍穗耳尊
より人むむむの尊のみむを天万栲あまのよろづ
幡千幡姫を娶て妃とて児とて天照あまのひ
国照彦火明命とてつは是おまりの連つら木
つとを所おわり次に天饒石国饒石天
津彦火瓊杵尊この神大山祇神の

ひとめ木花開耶姫命を娶て妃と
て児をうまむむ火酢芹命は

是次に彦火に出見尊
兄火瀨降命をきほつ海の幸さちまゝ人
寺の彦火に出見尊とのほつ山の幸まゝ
是より先兄弟二人あひつらつてのさか
くころこよ幸人とおふと云ては
あひかうかのくその利とらとえを兄悔くひて
是より先弟のこころの弓箭とてて已

よりのりいまるその宮いづこひめ 雑まじ 蝶たて とのほり 彦ひこ
宇う 下した のきり 門かど のまへ 一の井い あり
井い のふちり 一のほの湯ゆ 津つ 杜つ の樹き あり 枝え
葉は 一のり 時とき のひこ ほとこの尊みこと そのよの
とよほめてよりほひこまみまふやひ
けくしてひとりひとり の養人やしん 阿あ 園えん とあり
らひておては井い の玉たま ありてりてきりて
水みづ とくむふめてあふてりてきりて
もらちりひくり入い てその父母ちち のま

して云ひしりのめほりしりひ 容者ひら まいま 門かど
のまへののりまへりしりひ の神かみ
八重やへ 席ま 蓆ひ をりきてりて延の てるめはま
治ち めるときまてそのりてませるみくちを
とふ時とき のひこりてこの尊みこと あつちをこ
りまふりしりひ の神かみ をしちちち とをり
ひひりてまてりてせのりしりひ のま
くまま のめりり 赤あか 女め 赤あか 女め 雛ひな この比ひ 口の
ひまま のりてまてりてこれこれ をめ

その口をさくしとすくしとせざる。釣ととうを
得とてひこほてみの尊よてまはしこの神
のじも然しもいひめをのをもよてしる。はまの
まよとままり流りとまてしとせざる
ぬそとままりやまりとまのしとりとま
と御みとまりとりとまり故とまりとまり
とまりとまりとまり豊玉姫とてその父ちちと
まて云天孫あまの孫とてまりとまりとまり
まりとまりとまりとまりとまりとまりとまり

はまの神まはしとすくしとせざる。釣ととうを
得とてひこほてみの尊よてまはしこの神
のじも然しもいひめをのをもよてしる。はまの
まよとままり流りとまてしとせざる
ぬそとままりやまりとまのしとりとま
と御みとまりとりとまり故とまりとまり
とまりとまりとまり豊玉姫とてその父ちちと
まて云天孫あまの孫とてまりとまりとまり
まりとまりとまりとまりとまりとまりとまり

あまをきこふもはなしてあはれをよとて漬むまれ
ち湖とらきくろしをらんこれなめていませ
この兄を没溺^{おちせ}する人の一兄くわへ祈^{のま}
ついであはれひきつげをよほちのい
洞^えうきあへまひたまりかゝるま
よきまもちのまみよの兄いひるん
まよるるはさ人とまよるるおらんときよ
まひめ天孫よりわけてまよるるまを
らめりまよるるまよるる久しと
まよるる風波ちるる日とり海濱^{うづみ}おい
くらん清我^{きよが}のめは産室^{うぶや}をほりてあ
いまちりし戸は火に出見尊をいりて
りよのまよるるまよるるひとつる海の神の
よよあまの時兄火瀬降命をてよを
やまねしてまよるるまよるるまよるる今
まよるるまよるる昔まよるるまよるる
の民くらん請^{こが}いきまよるるまよるるの
まよるるまよるるまよるる火瀬降命を

自菟罪

優

ち吾田君小橋ホつとをつおやなり後豊王
姫あまさくしさきのちさくしさきの女
赤玉依姫とひらみてくは風波かぜなみをわけて
海邊うみづかのつらこころもときよかよんで請こいて
うさく妻つまのうむもかみかみはふこは
そ天孫あまみことさきさきのふとほりもさきひそ
くゆしてうらひゆふは姫方産ひめがたうぶ龍りゆう
よさうめもゆきもさきさき我われをさ
しめさうとほりせはまのまら海陸うみづかあひ

かよさくめてさくしづいてさのこさく
し今きてよちちさくし何なにとめてさむ
ほまきさくしをむもさくし草くさを
りつて児こをほんで海邊うみづかの途みちを
とらてさくしをぬ故ゆゑとめて児ことさくし
彦波瀲武鸕鷀草薺不合尊ひこなみとさくし
久ひさくさくして彦火ひこの出見尊ひこ崩たふれぬ
日向ひなたのさくしの山上やまの上の陵かみ葬まじり
一書ひととみの兄あに火酢芥命ひあそがいのよく海うみの幸さちを

おのみこと彦火々出見尊をゆく山の幸と
う時、兄おたがひ、その幸と入人と
おのほも故兄おのミ、その幸弓をあら
て山に入獣まき、ほひ、獣の乾迹し
みもおのみこと兄の幸釣さちとりちこまて
海、入奥、ほひ、う、お、ほひ、
の釣と、う、ふ、この時、兄おのみことゆい
わと、う、ておの、釣と、お、おのみこと
う、て、お、お、お、お、横口こちを、釣ち

を、ほ、く、り、一、箕こ、より、て、兄、よ、ほ、く、り、
兄、う、も、ま、り、て、云、を、お、お、幸、釣、を、
う、う、ひ、こ、ほ、て、お、の、尊、り、と、お、
ら、行、は、海、辺、り、う、り、て、お、お、
き、ま、お、の、時、ひ、お、の、長、老、あ、り、こ、
ら、う、り、う、り、塩、土、老、翁、と、る、の、別、ち
こ、つ、て、ま、う、く、君、ハ、是、誰、何、の、ゆ、
よ、う、う、ま、ま、や、ひ、こ、ほ、て、お、の、尊

ほぶさよ具あらしをのこま老翁を
なまらふらちの中のかくくをとりて地
よちやしうをれちち五箇竹林にれ
よぬよてその竹をとりて大目麻籠と
つらうてほてみの尊と籠の中よりれ
ゆらきてあしれまら

一之垂目堅間をりて浮木はくりて細
繩をりてほてみの尊をゆひつけまらきて
ふた玉いもりうはて是いまの竹の籠

るり時、海のそよおのほはは可うき怜小
汀ありまらちち汀のまじりてまら
なちまらちつたほみの神豊玉彦の宮
よじりまらそのま城瀬くくまら
いものうをれちちうまら門のほら
井あり井のうまらにうまらのまあり
まらまらこのゆまは井てまらほら
や、くまらしてひまらのまらあり
うほまらまらまら侍者むまら

内より一ておほさる玉壺いまだらとて玉水を
くむあひひてほめてこの尊とみてまれと
ちりてその父の神うぢをまうして云門
の前の井のうさののりひとひと
の貴客きやくあり貴法きほふひとまをりそ
天よりくられくまは天の垢うけあり
一地よりのかまはほさる垢うけあり
く一ほとに是ま妙養まう虚空こくう養まう
ふりの

一云とよはぬ姫の侍者玉のほくをりて
氷とらむほひよつうとありそい
うて井の中とまれもまらるは
うさま一人のあめつは映りよてり
あふみまをひとりのうほよき神
まして杜つのさよよりとてり故入り入
てその玉たままう人て豊玉とよたま彦人を
まうしてつてまう客まうとれ誰
え何のゆりうとてまうりて

尊^{みこと}はつての^{みこと}はま^ま 吾^{われ}は是^{こゝ}天神^{あまのつみ}
の孫^{みまろ}なりま^まはらほひ^ひい^いてま^ませ^せみ^み
こ^ころを^をの^のこ^こま^ま時^{とき}に^にま^まは^はら^らの^の神^{かみ}じ^じふ^ふ
か^かみ^みひ^ひわ^わり^り入^いり^りて^て初^{はつ}人^{ひと}に^にら^らは^はら^ら
う^うま^まの^のよ^よく^くむ^むま^まの^のま^まま^ま姫^{ひめ}と^とい^いて^て
あ^あま^ませ^せま^まは^はら^ら故^{ゆゑ}に^にほ^ほの^のみ^みや^やと^とま^まり^り
い^いま^まさ^さし^しと^とま^まで^での^の三^{さん}と^とま^まら^らん^んぬ^ぬこ^この^の
ち^ちは^はつ^つて^ての^の尊^{みこと}と^とい^いて^てま^まけ^けさ^さま^ます^すこ^こ
と^とい^いて^てこ^こよ^よこ^この^の姫^{ひめ}と^とい^いて^てま^まま^まら^らん^んと^と天^{あま}

孫^{みまろ}なり故^{ゆゑ}に^に郷^{きょう}に^にう^うら^らん^んと^とお^おほ^ほら^らん^んと^と
え^えて^ての^のま^まま^まら^らん^んと^とい^いて^てま^まま^まら^らん^んと^と天^{あま}
父^{ちち}の^の神^{かみ}と^とい^いて^てま^まま^まら^らん^んと^とい^いて^てま^まま^まら^らん^んと^と
貴^き客^{きやく}上^{じやう}国^{こく}は^はら^らん^んと^とお^おほ^ほせ^せら^らん^んと^と
ほ^ほの^の神^{かみ}と^とい^いて^て海^{うみ}の^の奥^{おく}と^とい^いて^てま^まま^まら^らん^んと^と
つ^つて^てその^の釣^{つり}と^とい^いて^てま^まま^まら^らん^んと^とい^いて^てま^まま^まら^らん^んと^と
つ^つて^てま^まま^まら^らん^んと^とい^いて^てま^まま^まら^らん^んと^とい^いて^てま^まま^まら^らん^んと^と
巴^は式^{しき}之^の鯛^{たい}と^とい^いて^てま^まま^まら^らん^んと^とい^いて^てま^まま^まら^らん^んと^と
ま^まま^まら^らん^んと^とい^いて^てま^まま^まら^らん^んと^とい^いて^てま^まま^まら^らん^んと^と釣^{つり}

まを口よありまをれをちこれとえてまを
ちりりてひこほてこの尊うてまを
るまをちりりてまをまを釣ま
ていまふまの兄よあまを清まんと
まをまをちりりてまをいまを貧窮の
れと飢饉のちりりてまをひのまをの
いまをてのちりりてまを清まをい
みまの兄まをまをいまを昔ま
らす迅風たつ風洪濤たつみまをて其まをいおほ

あれまをるまをいまをほてこの尊ま
大鯨おほいのせまをちりりてまをまを
まをちりりてまをいまをまをいまを時
まをよまをちりりてまをいまをまを
くまをてまをちりりてまをいまをまを
らん日とりて海まをい出てまをい請我
まをいまをちりりてまをいまをちりりて
まをいまをちりりてまをいまをちりりて
まをいまをちりりてまをいまをちりりて

く妻こしひ子うまんを請るこまを
ほいてこの尊きこゝめさきこゝてまを
指とめて火とともみそあき八時
とらへ寸娘八尋の熊鮮よちうて南宮
透地はひよもはうめしこゝちりて
うめしこゝてまをさら纏よちうてはこ
くまうらその女才玉依姫とこめて
児と養きこゝしよのゆへ児の名を辰波
激武鷗鷄草菅不合尊とまうらゑの海

濱のうぬやまこゝうの羽をりて草
てふける巻をあらまきと記し児ま
さら生ませるまりてのゆへよてりて名
はあらてまひ
一書よ之門のまよ一の好井あり井の
ほりよ百枝のうはりの木あり故ひこ
ほいてみの尊そのまをまりのちりて五
とほり時よまはひの神のむもあ豊玉
姫手よ玉腕をりてまうらてほきよ水

をくひもつゝ人氣こころの井の中よあをを
とてまはしちちあふひてきておこらきて玩あそぶ
をわつはつてまはしてまはれくさきめま
とらふらみまはてらふ入て父母ちちうぢよ
はて之妻ひとりの人井の辺はたけのきのう
とまはれまはつてほれまはれまはれ
をひらけほれんとく人まはれを時
と父の神はてあやとてまはれちち
わつてまはれまはれまはれまはれまはれ

おめうとまはれまはれまはれまはれまはれ
こころゆつとあふひてまはれまはれまはれ
はまの神まはれまはれまはれまはれまはれ
こころゆつとあふひてまはれまはれまはれ
あつて問をまはれまはれまはれまはれ
女らちのまはれまはれまはれまはれまはれ
口女くちめらちのまはれまはれまはれまはれ
まはれまはれまはれまはれまはれまはれ
くれまはれまはれまはれまはれまはれ
針釣ちりちちまはれまはれまはれまはれ

えつらうよまははの神せめて云你口
女いまりゆきさきほりくふことえり又
天孫の餅あつむしをれちち口女奠を
りて御者よとてまつくさるゆいこれ
そのことのももなりひこほつてこの尊か
つりまるとさる時いりりてまははの
の神まうしとまうきく今も天神の孫
つらまははの昔処よとまははの
よろこひいほきめ日りまははのまははの

らあひつとまははの潮溢え瓊ありて
そのまははの潮固え瓊ありてその釣いそ
てまははのまははのちく皇孫やのく
つらまははのつらまははのつらまははの
まははのあひおほてまははのまははの
よまははのまははのまははのまははの
いまりみとの兄よあまのつらまははの
ちち貪釣減釣落薄釣とのまははの
いまりおまははのりてまははのまははの

ゆゑに海へむむしてゐるさつきのまじひも
しよのふいりとおうてとこふ心
あはれなるちりしほろよを叫んで
おほくめしよるおまんとしりて
めくみしとこぢいれちりしほひま
をわけてめてもくひぬくくせあわ
まげさのつゝあさくひるん時いじ
ほてみの尊の瓊し釣とをうせて女
まゝりいてまひひとりほとの神

のきしよのまりく先その釣とりて兄
よほくしよまふ兄いりてうまひ故才
のこししほろよをおせしをれちり潮
おほくしよちり兄えれおほくしよちり
請ておほくしよ昔ささいませみことつ
うまつか奴僕しん初めちりいあま
才のこししほろよをおせしをれちり
しほろのつゝ洞て兄えりてしよち
ぬまきよして兄えまのこししよちりて

云吾をえれいづみよのこのみなり
いんそ人の兄とて才は名人やと
才の...と時よはらよとわたり
兄えをきて高山よけのやをえら
潮まゝ山よも兄高樹よのけをえら
ら潮まゝ樹よも兄をてせまうて
さうおゝしをえららららら
く者きてあまをて...
昔り子孫のやそげきほのよはらよ

いづみよの 倭人...
一云物人ふらみは才のみと
は...ひね...兄おの...
あ...
て火酢芥命の南裏りくくの倭人ホ
い...天皇の...の傍
を...にほゆり物してはら

ちりりのなり世人うせらる針をささ
さるいれ具ことりのりとなり

一書よ云兄ほのむそりのみことく海の
幸とて故海幸^{うみのさちい}後し多つく才^{さい}じこほ、
てこの尊とてく山の幸とて故山幸^{やまのさちい}秀
とまうも兄さるもち風かき雨かきと
よまゆもちその利^{さち}とてく才^{さい}のみに
さるもち風かき雨かきとまその幸
くもみ時、兄おとのみことまうつて云

昔うらなは汝と幸とせんとおふ才
のみとゆしてよくふ時、兄おとの
みとのゆをとりて山へ入て歎をう
才のみと兄の釣をとて海へのちんて奥
をたると利^{さち}とてみむるも年ゆし
てうら兄さるもち才のゆををえりて
その釣をさる時、才のみとてて
釣と海の中うしるふてまひひし
むらうりや政とてりし釣教

千とほくらて げん げん 兄いりてうせ
をりとの釣とせめ 急責 ちかこの時カ
のみと海濱 うづい けきてうるれめくあり
まゝいままふ時、川原 かわはら 霜 しも のり
いゝまむ ま あまし あま といふ い
ろをかう う て て とい い とも も ら ら や や あ あ ら ら
して し ち ち ほう ほう つ つ の の 老 らう 翁 う あ あ り り て て き き た た と と て
則 すなは ち ち ば ば ら ら ー ー ー ま の の 小 せう 船 ふね と と ほ ほ くら くら て て は
ほ ほ て て み み の の 尊 たうん と と の の せ せ ま ま ら ら 海 うみ の の 中 なか の の ち ち を を

ち ち ら ら の の ち ち ら ら を を の の ほ ほ くら くら ー ー ほ ほ くら くら
ち ち ら ら ち ち ら ら の の 可 う 怜 れん 脚 きゃく 路 ろ あり あり 故 ゆゑ ち ち ら ら の の ま
あ あ ー ー ー ま の の つ つ ー ー ー ま の の つ つ ー ー ー ま の の つ つ
神 かみ の の 宮 みや ー ー ー ま の の 時 とき ー ー ー ま の の 時 とき ー ー ー ま の の 時 とき
の の 神 かみ ー ー ー ま の の ち ち ら ら ー ー ー ま の の ち ち ら ら ー ー ー ま の の ち ち ら ら
海 うみ 驢 うし の の 皮 かわ 八 はち 重 じゆう ー ー ー ま の の 上 うへ ー ー ー ま の の 上 うへ ー ー ー ま の の 上 うへ
ま ま ー ー ー ま の の ち ち ら ら ー ー ー ま の の ち ち ら ら ー ー ー ま の の ち ち ら ら
を を ま ま ー ー ー ま の の ち ち ら ら ー ー ー ま の の ち ち ら ら ー ー ー ま の の ち ち ら ら
あ あ ー ー ー ま の の ち ち ら ら ー ー ー ま の の ち ち ら ら ー ー ー ま の の ち ち ら ら

のゆゑにうゑのこもあつてまはる
一云よ比昔見うらうて云天孫海濱
うまひとくさう何つちうは
まをききしあはらひは
この尊はふせよあはらちをのこ
よつてさまりまはる海神を
ちそのひをめとよひの姫を
るはひの纏綿と葛巻してきて
よらんぬらうのまはる

をうてまはるはみの神を
をめてその口とさうし
釣とえてこよの釣をひ
まはるうらうてまはる
えをめていまみよの兄
ときよをいちらのまはる
貪釣痕後釣とのまはる
まはるうらうてまはる
てまはる鯛魚とめはる

神の孫いさくりまきんといふをの教日
 り内よくくまらうん時りりくの
 鯨魚おのくそのうきみくさのまき
 その日教とさくむ中は一尋の鯨ありみ
 法く酒うまく一日のつらまれまら
 一まきく一故まれまら一尋のよまを
 まきくめてをくらまてまらまき潮
 満瓊一ほひま二くこのく物とてさ
 法りどく瓊をりらゆ法とまき

又まきまらて法うま高田をく
 らまきまみと法田と法くらまき兄法
 田と法くらまきまみといふ田を法くら
 まきまらつきの神まきを法くして
 まきまらつきの神まきを法くして
 みの尊まてまらまてりらまらま
 まき法きの神のまきくくつてまら
 おころぬその後のまらりのみと日まら
 り法まてまらてまきまら一貪まら

そら才のみとすうふ才のみと時
一は、何とあせをきれとら兄手
あけておほきくむむ久はて一ほひ
をかせはきれとらやとんて一いらぬ是
よりさよよとよひ日姫天孫ままきく
く妻をてくもめり天孫の胤あり海
中よりみまらふきんや故こころまんと
一さうい君のみもとまらてん
よめようぶやを海辺へはくうて

あつてあひまら一まこれ雨守なり
故にほてこの尊をて一卿、うりて
まれとらうの羽をてふきてうらや
をほくくやの麓まらふき河をやめ
とらま娘みつゝ大亀よのり世才玉依
娘をひきめて海とてりていつ時、月
まて、みちてよらむとまみ、うらよせ
このれよとらふき河をきくまらて
経、入まひまておらうよ天孫よまら

てほろろと妻みさうりよ子うまん請る
あみまゝえ天孫ミコウらふそのと感あや
てひそくううひ孫ふまらちら八尋の
大鯨オホニギハヤヒなるぬりの天孫のいまみい孫
こころを初てふくまらうみほつこと
をうくもてゝ見うまはてのらう天孫
ゆひてとつてのいまきゝ児の名いふれ
ほけいよきんこころをうまはてと終て
鷓鴣草膏不合尊とまらととと終て

てまらちら海をまらたてうにらりぬ時
よひこほつてまの尊をれちらあまみ
してのいまき

おきいちりりほくちほらまら
いひいひきりりよのこころ
まの云夜火に出現尊婦人をとめて乳母
湯母とよひ飯爵湯坐とらぬふとて諸
言るるちりりて養いしり時より
化姫野ととらて乳ちりて皇子と養

世のいづれに中・乳母ととりて児を養
ふとのいづれにちよひにさす娘を
の児のいづれに心とびて心し
はみありてまゝらり養人とお
ふ、いづれにあひてまらぬ女才王
依姫とまゝらりてまゝらり養人とお
時よ豊玉姫命玉依姫よよせて
うゝしてまゝらりて云

あゝ海のひつりもあはとひつり

さえりよきひつりありら
とてよの贈答二首とまゝらりて奉寄
とて

一書に云兄のまゝらりのみと山のさち
さう才の火折尊海の幸利と人し
才のみとまゝらりて海濱のまゝらり
垣筒の老翁とあふ老翁と何れもまゝらり
何のゆゑとまゝらりて火折尊
つてのいづれにまゝらりて老翁とまゝらり

あるまじき昔の事人々
まじきついでに社の跡も
馬を八尋の鯨なり是を鯨背とて
てんちをみるの小戸あり昔
とていふ事にして火折尊と
つていふ事ゆひにきく時
昔ハ八日のちまは天
孫ともいふ事ゆひにきく
一我王のまじき馬一尋の鯨

是は昔の一日の事なり
てまじき故に我王の事
いふ事ゆひにきく時
海に入るといふ事ゆひに
可憐小川あり小川の
まじき我王の事ゆひに
まの川の井のほろよほろ
の樹ありてまじき事ゆひ
まじき事ゆひにきく海

入て去ぬ故天孫よのまうちの
あまのこもりてあひまうちをきてよ八日
ひさあうちてはよ一尋のよのあ
てあまのこもりて乗て海よ入とく
よあまのこもりのまうちの時よ豊
玉姫の侍者あり玉琬よりてはよ井の
水をとくむよ人影もあまをみて
くまのこもりてえひよりてあまひて天孫
を三河ももち入てその王よはきて云
吾

我王ひまうちくまうちてう不よとれ
あひまうちひまうちの客ありあまのこもり
まうちの神はて云くまのこもり
あまのこもりてあまのこもり三の床よまうち
て入ませしむらよ天孫迎床よあまのこもり
まうちのあまのこもりのあまのこもり中の
床よあひてあまのこもりあまのこもりのま
まうちの床よあまのこもりあまのこもり
よ真床覆のあまのこもりあまのこもり海神み

てそれらならん天神の孫と云ふ事を知
てまもくあつたやまふ云々といふ
の神赤女あかめ口女くちめをりてと云ふ時口女く
ちより釣つりと申してりてさて申す赤女
をましちち赤あか鯛だいより口女くちめをましちち
奥おくより時ときもほとの神釣つりとひこぼして
この尊みことこつけてよめてましちち申して
まうさく兄あに釣つりと云ふは後のちと云ふ
天孫あまのみことをるちのまふは汝なうこの子

のそほつきれちち貪釣あまのつり狭さ貪釣あまのつり
のまひおまつて三さんひはまきてあま
ぬまし兄海あにうみ入いりてはりせの時とき天孫あまのみことは
海濱うみづらよりて風かぜ招まねたり風招かぜまねは
ちちちうなづ喃なみたりりくせとるちち君きみお
はうせ也な風かぜをかうて奔波あそびをりてあそ
ちちまうん火折あまのひまき尊みことより来きりてはる
まはほみのましちちのましちち兄
はうちち日ひよりりオのみと云ふ

まじくしてうきふきぬふ時、迅風はやかぜたちり
らるゝ兄あにをいさらおほしむむ生なまづ
よきまきもあらちるるオのみし
よもししてはつちてみよとく
く海原うみはらよすてうあひよき術わざあ
む新あらたくしてきこひぬの、我を
いけんもく君ううのこむ新あらたく
みよのこころのあはれなるしそ
こ、能あた優やさの民たみたりん、オのみしう

まじくしてまて、わむて風かぜをうき
まらぬ故ゆゑ兄あにかよのみよのいさむじを
し、いひるん、オのみしおほて
てあひいまは、こよ兄あに着か擗な鼻はな、て赫あつと
りて、うきよなりありて、ぬりてその
オのみし、まて、つて、昔むかし身を
きりま、かくのこも、ひく、あつ、ま
こよのよきあひ、ひく、うき、あ、あ、
ひきて、みて、その、うき、この、うき、を、うき

ひかよしうはこよのりしなり
一云児とありささくこいありし
こ姫の命ニほくひひてゆくやひ
うりして云天孫の亂の海の中と云
まほくひといひてそれら玉依姫
なしてこのめてなつり出まつるは
あまのこ姫よるまこいようみ
ひらりさる故火折尊そのまさあ
うさるこをしうりてそれら贈

歌ありてよよよこい

秀波濑武鷗鷄草薺不合尊その姨玉依姫を
りて妃とて彦五瀬命をとりませり次
稻飯命次三毛入野命次神日女磐余
彦尊とて四つらのひこを生ませりひ
こあもせむの尊西列のまよ萌ませりて
日向の吾平山上陵に葬せり
一書之兄彦五瀬命と生ませり次

